

AIの光と影 じっくり

福井大院生ら羽水高で授業

人工知能(AI)社会の到来による利点と課題を考える授業が福井市の羽水高で行われた。福井大院生と弁護士が、医療分野と自動運転をテーマに授業を立案。社会のさまざまな課題を見つげ出す力の重要性を生徒に伝えた。橋本康弘教授が指導する、大学院教育学研究科の「協働実践研究プロジェクト」の一環で同科2年の竹澤優善さん、上野仁土さんが教壇に立った。福井弁護士会法教育委員会委員長の後藤正邦弁護士がゲスト講師を務めた。

医療、自動運転 課題探る

「変化を書き出し、医療従事者、患者、社会全体にとって『望ましい』か『望ましくない』かを価値判断し、色分けした。ある班は、良い変化として診察や手術をAIが行うことで『医者』のストレス軽減」が図られ、生き生きと働くことにつながる。一方、悪い変化として、AIに任せきりになることで人間の「応急処置力」が衰え、いざというときに対応できなくなるのではと推測した。



AI時代の到来による課題、利点について考える生徒たち
＝福井市の羽水高

どの公共交通機関が不要になり、運転手が失業してしまうのではと予想した。それぞれの授業の最後に後藤弁護士は「医療でも運転でも仮に事故が起きたとき、誰が責任を取るのか。機械メーカーか、プログラマー作成者か、運転手か、制度を導入した国か。また、AIが下した判断を心情的に受け入れられるのか」という問題もある。人間とAIの関係性をどう築くかは難しい問題だが、私たち自身が考えていかなければいけない」と指摘した。

その上で「これから生きていく上で大切なのは、答えを出すこと以上に、課題を見いだす力。課題が見つかれば対処する知恵は出てくるだろう。社会をいろいろな角度から見て、想像して、どんな問題が起るのか抽出する力を伸ばしてほしい」とまとめた。(宇野和宏)